

慶應義塾高校野球部＝おおぐろの森中学校

～Enjoy baseball（選手が自分で考える）→

Enjoy learning（生徒が自分で考える：自律）～

2023年夏、今までにない猛暑であった。気候も暑かったが、この夏に行われた様々なスポーツも熱かった。その中でも第105回全国高校野球選手権記念大会では2年連続優勝を目指した仙台育英学園高等学校を破り、慶應義塾高等学校が107年ぶりに優勝し、話題を呼んだ。慶應高校選手達のさわやかな笑顔、坊主頭からの脱却、新たな考え方による自然な取り組みには大いに共感できる場所があった。そして今、おおぐろの森中が目指しているマネージメントポリシーと同じであると強く感じた。

それは、優勝インタビューの森林貴彦監督の言葉にあらわれていた。「うちがこうやって優勝することで、高校野球の新たな可能性とか、多様性とか、そういったものを何か示せばいいと思って、日本一を狙って、常識を覆すという目的に向かって頑張ってきた。何かうちの優勝から新しいものが生まれてくるのであれば、うれしく思いますし、うちの優勝だけではなく、高校野球の新しい姿につながるようなこの勝利だったんじゃないかと思います」

私はこのインタビューを聞いたとき、もっと森林監督の指導方針が知りたくなり、すぐに調べ始めた。するとネット記事に以下のような内容が記されてあった。『慶應が優勝したら、世の中がかわる』である。内容全部を紹介したいところではあるが、紙面の都合上、一部紹介させていただく。

・多くの人がイメージする「ザ・高校野球」があるとしたら、慶應は違うやり方にチャレンジして、野球自体の幅を広げたい。「こういう考え方もあります」と他のチームや指導者、世間の人に対案する役割もあるのかなと思っています。坊主でないことも、その一つです。

・私は、野球の監督よりも中小企業の経営者という意識が強いので、いかに良い組織にするか、一人ひとりが生き生きと取組めるようにするにはどうしたらいいかを常に考えています。

・指導する上で一番大切にしているのは、選手が自分で考えることです。放任ではなくて、ああしろこうしろと言われて従うだけになったら、やらされる野球で何も面白くない。指導者がよかれと思っても、教えるリスクをもう少し考えないと、「教える＝選手がうまくなる、チームが強くなる」というのは幻想にすぎません。ちょっと遠回りになっても、選手に考えさ

せ試行錯誤して最終的に自分で掴んだものが真の力となるという考え方で
す。

・戦前や戦中、戦後すぐのいわゆる昔の体育会系。監督の言うことは聞き、体を鍛え、チームのために働く「努力、忍耐、我慢」という価値観を、野球界はずっと引きずってしまっています。今はそういう時代じゃなくて、世の中に出たらどれだけ個で勝負できるか、一人ひとりのアイデアが重視されます、AIも出てきて、人間にしかできない仕事を見つけて行かなければなりません。

・そのチームや選手たちが考えた結果「坊主がいい」ならもちろん構わないし、指導者もいろいろ考えた上での判断であればまだいい。そうでなく、「今までそう」「高校野球は坊主」というだけの理由なら、改善すべきだと思います。大人や見る側の人「高校野球はこうあるべき」というイメージや、「坊頭で全力疾走」「勝っても負けても涙」といった青春ストーリーを勝手に作り上げて、継承していく。選手たちがそれにはめ込まれていると感じます。選手だけでなく、指導者や周りにはいる大人、みんなで変わっていく必要があると思います。

森林監督には大変失礼だと思うが、私の考え方と同じ人がいらっしやったと深く親近感を覚えずにはいられなかった。追記するが、慶應高校野球部は監督が考えて部員に示した練習メニューを部員たちで考え「その練習は必要ない」と部員たちが監督に意見表明することもあるという。なんと素晴らしいことであろうか。

『愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ』という格言がある。経験だけに頼るのではなく、歴史を知り、先人に学ぶことは大切なことであると思う。そのことを踏まえ上で時代や未来の行く末を見通し、新たな取り組みを創造していくことが未来に羽ばたく子どもたちには大切なことであると感じている。

『伝統は守るものではなく、創っていくもの』だと思う。これからのおおよろの森中学校を益々、生徒、保護者、地域の皆様、教職員で「学校の当たり前」に疑問を持ちつつ、常にアップデートとバージョンアップを繰り返しながら、学校教育目標である『自律』を目指し、将来を担う生徒達を真ん中に置いた取り組みを推進していきたい。

校長 前川 秀幸